

口駅」を利用する客が激減し、高野下駅を利用する客が激増し大いに栄えた。

しかし、昭和4年（1929）から5年にかけてこの高野線の「高野下駅」から「極楽橋駅」更にケーブルカーにより「高野山駅」まで延長された結果、電車の利用により直接高野山まで登山できることとなり、推出界限も急激に廃れることとなった。

(9) 個人・高野山大学図書館の古絵図

史料⑥-2 個人（和歌山県立博物館特別展図録）

参詣要覧 高野山名所図絵 大正11年（1922）

史料⑨ 高野山大学図書館 参詣要覧高野山名所図絵 大正11年（1922）

和泉山脈の上空から高野山全体を俯瞰し交通路全体と高野山については名所と宿坊を記した横に細長い地図に著色印刷した図である。高野口駅から九度山橋を経て町中の中心ルートである「中通」を通り、「明神社」から「雨の森通」を経て丹生川の赤瀬橋を渡り推出駅（計画中）に至るまでは人力車や自動車（乗合いバス）までが描かれ、ここから先は旧来の槇尾道を徒歩で登山していたようである。

南海電鉄高野線については大正14年（1925）に推出まで開通するのであるが、既にこの11年の古絵図においてはまだ布設の工事中であろうがこの線路上を1両編成の電車が通行している状況が描かれている。

また、この絵図には「推出」から「古沢」・「細川」等を経由し高野山大門まで荷物運搬専用の『高野索道』（明治43年完成）が描かれており、近代的な交通路・機関等の計画とその実施の様子がうかがわれ、如何に多くの人々が高野山を目指していたかを知ることができよう。

町中は旧来の「槇尾道」（中通）ルートとその南側で真田庵（善名僧院）の北を通る「南通」ルートが描かれているが、非常に大縮尺な地図であるため町並の構造等まで判明するような特徴は描画されていない。



史料⑨-1 部分



史料⑨-2 拡大

真田庵の名称についてはその本尊にちなみ縁起書や「紀伊国名所図会」においては『地蔵堂』と標記されてきたが、明治時代中期頃になってくると古絵図（観光案内地図）や調査した道標等には『真田幸村公旧趾』等と記され、信仰中心から物見遊山（観光）的な名所・旧蹟として大いに著明となってきているようである。この背景には、江戸時代からの「軍記物」や「講談」などの大衆娯楽文芸が大いに流行って真田昌幸・幸村の事跡を題材にしたものが演じられ、明治時代に入ってから立川文庫による「真田十勇士」等の物語が出版され、真田幸村らに対する狂信的な憧れが根底にあったと思われる。

これらの近代の参詣ルートと町並については、非常に興味のある紀行文が残されている。藤島玄治郎博士（元東京大学名誉教授、日本建築史）が大正7年（1918）に岡山第六高等学校1年在学の折に高野詣をした時の記録『高野山紀行^{註22}』が残されており、当時の状況・風物・人々の情景・自然環境・里程等詳しく記した貴重な記録である。

この紀行文には「真田昌幸公遺跡」と記し、町中の本街道（中通）からわざわざ外れこの寺に寄り道し昌幸・幸村の著明な事績に思いを馳せ、昌幸の墓前で数分もの間佇んでいた心情等を美文で綴っており、如何に広く知れ渡った名所・旧蹟であったことが判明する。

この紀行文はこのことのみでなく、大阪から鉄

道で高野口駅に着き町の様子・道路・行き交う人々の様子を克明に記しており、参詣道・町並・周りの文化的景観の復原等に関して非常に興味をそそらせる史料であり、九度山橋を渡る前後と町並について次のとおり詳細な情景を記している。

『道が又右に曲がると紀の川の浅い流れであった。流れとて殆どないこの川は見渡したところ一面に磊々たる砂州で、その上を多くの人の自然に踏みかためたあとが小石原の中にかすかに道を示していた。物の十間もゆくと初めて俄作りの木橋となって本流を渡るのであったが、橋は多数の人や車の往来につれてかなり上下に揺れた。橋上より下流を望めば、川は右より大きく曲がって河原の間を流れ、その流れは涼々の音を立てている。その上に雨引山は聳えていた。

対岸は直に九度山町である。岸に高く石垣を築き、その上に高く人家が建ち、橋を渡り河原に又下りると直ぐにその崖を仮設の足場で上らねばならなかった。私が未だ橋の半にも到らぬのに大勢の人の続々とその足場を上り、人家の陰にかくれてゆくのを見ては只なんとなく息がせいて仕方がなかった。その道を一町も行くと道は左に折れ全く九度山の町に入る。』と詳しく記されており、当時の情景が手に取るように判明する。

このことから、紀の川右岸の堤防から砂利浜の踏み固められた通路を歩いた後に仮設的な木造の橋を渡り、河原に降りるとすぐにその崖に設けられた仮設の足場を登らなければならず、大勢の人々が続々とその足場を上がり集落の陰に隠れていく様子を記している。

この時期の情景を撮影している古写真（自治制公布100周年記念「100年のあゆみ」九度山町 平成2年発行）が残されている。「明治末年」撮影とされる写真で右岸下手の堤防から南東向きに撮影されたもので右岸の河原・橋・九度山の町並が写された古写真であり、管見のうちでは町並が映されている最古の写真である。橋の南詰めと町並の西端部は映っていないが高い崖上には密集した集



写真 3-145 「100 年のあゆみ」 から

落が東に向かって大きく広がっている様子が観てとれる。

東に広がる崖地と町並は撮影範囲には入ってはいないものの写真は小さく不鮮明であるため町並の詳細は不明であるが、1078番地の箸蔵をはじめとして50棟位の建物が映ってはいるがほとんどは現況との比定は困難である。

西端崖部の仮設足場の施設についてはその位置は1550番地の河原家の北西部辺に位置するとみられ約20m位の高低差を登ったと考えられるが、この古写真には映っておらずその足場の詳細も不明で、現況は道路敷となっているのであろう。

しかし、高い強固な岩盤上に築かれたこの町並の景観としては個別建物の比定は困難であるが、自然景観と町並の概観は現況とほとんど違いはなくそのまま伝えられているといえよう。

この写真に撮られた状況において不明な事項がある。それは、右岸の堤防と橋の間に広がる川原に積まれた材木の山である。

明治39年に新しい土場を「入郷」に変更したにもかかわらず、九度山橋までの踏み固められた「道」の上流側にも大量の材木が積み上げられていることである。

入郷の土場はまだ未完成であったのか、撮影時には伐採量が特に多かったのかは不明であるが、入郷土場より相当上流側の川原にまで積まれていることである。

中西規陽子氏への聞き取りの中にある榎尾道（雨の森通）においてトラック等で木材を運搬されて

いたとされることで、古い安田島土場で降ろされた木材をこの川原の地点まで運ばれてきたのであろうかなどの疑問が生じてきている。

5 節 町並の現況

以上述べてきたように、九度山の町並は他に類例のない歴史と地勢的な経緯のもとで営まれてきたものでありその背景やその特筆な事について把握できていることについて述べてきた。単体の外観や現在の町並について特徴あるテーマを設定しその全域における事例について述べてきたが、その連続して繋がっていく景観についてはほとんど触れていないのが現状である。

このことから町並や文化的な景観として捉える必要があることから、単体が連続して「線」として繋がり、更にその線の幅が広がりその線と線がつながって「面」として広がっていく必要があろう。ためこの節においては視覚的な景観（中景的）な写真について、2節で仮称した『通り』ごとの区分（33頁の図3-2）により紹介する。

(1)『中通』の景観

『中通』についてはその西端である「九度山橋」辺りから「槇尾山明神社」辺りまでを順次東へ進む方向とし、そのうち「九度山橋」から「松山記念館」辺りまでを①『中通一西部』とし、ここから「対面石」辺りまでを②『中通一中部』とし、ここから「槇尾山明神社」辺りまでを③『中通一東部』に区画するとともに、通りにおいてはそれぞれその南北に広がる路地の部分についてはそれらを含めた部分もある。

なお、『明神辻』においてはそのまま東に向かって明神社に至る部分と、この辻を右折し丹生川の右岸に沿って「九度山駅」を経て「雨の森」を通る部分は時代差による新旧の「通」であることから③『中通一東部』に続いて掲載する。

①『中通一西部』



写真 3-146 西端の状況 1 (撤去)



写真 3-147 西端の状況 2 (撤去)



写真 3-148 元医院 (旧宿屋) (撤去)



写真 3-149 西端 近代建築 (旧銀行)

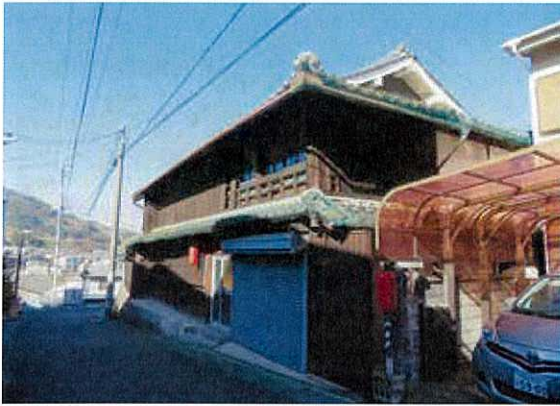


写真 3-150 旧宿屋 見返（撤去）



写真 3-154 東を望む



写真 3-151 旧宿屋（撤去）



写真 3-155 見返し

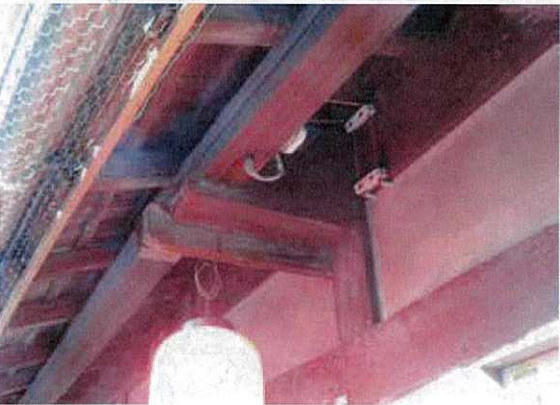


写真 3-152 弁柄塗り（撤去）



写真 3-156 連続する歴史的な建物



写真 3-153 現況見返（右奥の旧建物は無い）



写真 3-157 同 2



写真 3-158 出窓の飾



写真 3-162 見返し



写真 3-159 出窓の飾詳細



写真 3-163 南からの路地



写真 3-160 見返し



写真 3-164 東向き



写真 3-161 東を望む



写真 3-165 東向き 2



写真 3-166 同 西面



写真 3-170 記念館を望む 3



写真 3-167 記念館を望む



写真 3-171 見返し



写真 3-168 記念館を望む 2



写真 3-172 見返し 修景の状況



写真 3-169 見返し



写真 3-173 全体見返し



写真 3-174 同 2



写真 3-178 松山記念館 東



写真 3-175 見返し 薬局 看板建築



写真 3-179 記念館東の路地



写真 3-176 松山記念館



写真 3-180 記念館南



写真 3-177 松山記念館と坂道

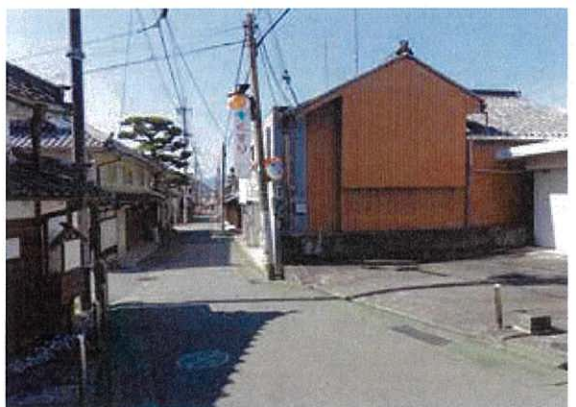


写真 3-181 記念館 見返し



写真 3-182 記念館界限



写真 3-186 特殊土蔵と織物建築



写真 3-183 北側路地 1



写真 3-187 舟戸 倉庫



写真 3-184 北側路地 2



写真 3-188 舟戸の景観 1



写真 3-185 舟戸の擬洋風建築



写真 3-189 舟戸の景観 2

②『中通一中部』



写真 3-190 舟戸の景観 3



写真 3-192 西部からの続き 見返し



写真 3-191 舟戸町並の全景



写真 3-193 旧観音寺跡の坂道



写真 3-194 旧観音寺跡 石垣



写真 3-195 中部 坂



写真 3-196 坂の見返し



写真 3-199 北の路地



写真 3-197 頂上部の看板建築



写真 3-200 南側傾面の状況



写真 3-198 南通への路地



写真 3-201 旧観音寺跡北



写真 3-202 土蔵と織物工場



写真 3-203 坂の頂部



写真 3-207 米金の見返し



写真 3-204 頂部見返し



写真 3-208 頂部見返し



写真 3-205 頂部の米金



写真 3-209 中通中央部



写真 3-206 米金正面



写真 3-210 北の路地へ



写真 3-211 路地 1



写真 3-215 旅館東の見返し

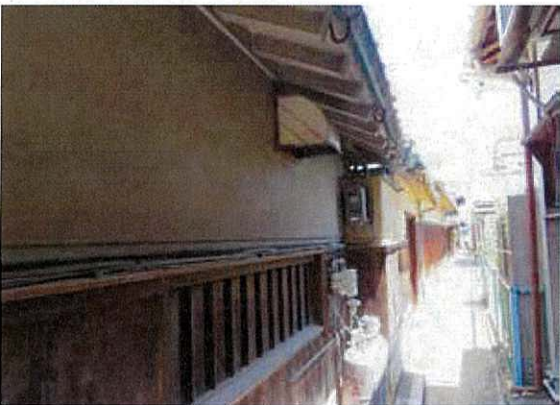


写真 3-212 路地 2



写真 3-216 分岐点・美濃部家住宅



写真 3-213 路地 3



写真 3-217 分岐点手前 見返し 1



写真 3-214 旅館・トロツコの線路



写真 3-218 分岐点手前 見返し 2



写真 3-219 分岐点見返し



写真 3-223 対面石



写真 3-220 分岐点と美濃部家住宅



写真 3-221 北部の路地



写真 3-222 対面石手前 町並

③『中通一東部』



写真 3-224 対面石 付近



写真 3-228 見返し



写真 3-225 対面石 南路地



写真 3-229 東へ下り



写真 3-226 対面石 東の町並



写真 3-230 下りの続き



写真 3-227 茶屋付近



写真 3-231 下り

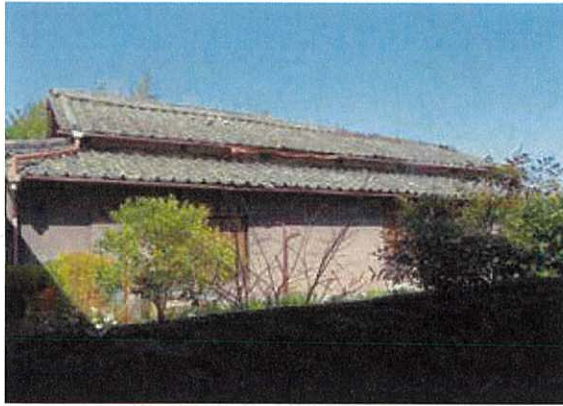


写真 3-232 北側路地の倉庫



写真 3-236 明神辻 見返し



写真 3-233 見返し



写真 3-237 明神辻北方の旧旅館



写真 3-234 明神辻へ



写真 3-238 槇尾山通より明神辻への見返し



写真 3-235 明神辻 手前見返し



写真 3-239 明神社への道 聖法院



写真 3-240 槇尾山明神社



写真 3-244 雨の森通の背面（西側）



写真 3-241 槇尾山明神社の社殿



写真 3-245 九度山駅

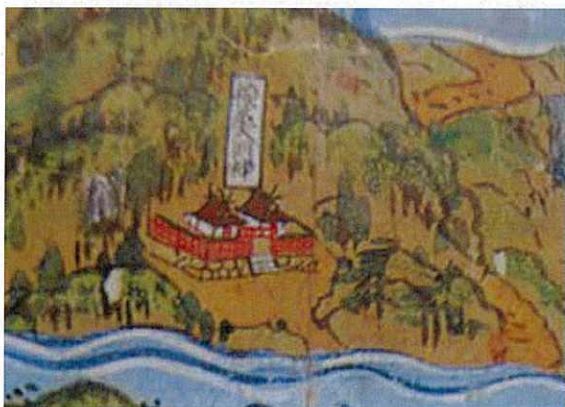


写真 3-242 槇尾山明神社古絵図



写真 3-246 駅前通



写真 3-243 明神辻 雨の森通への分岐

(2)『南通』の景観

『南通』については「桃園」地区の「分岐点」（真田古墳の北辺り）から「真田庵」の北を経て「丹生橋」辺りまでをほぼ西に向かって湾曲しながらすすんでいくことから、「分岐点」から「真田ミュージアム」辺りまでを④『南通一東部』とし、ここから「丹生橋」辺りまでを⑤『南通一西部』に区画しそれぞれその南北に広がる路地についても含めた部分もある。

④『南通一東部』



写真 3-247 南通への分岐（左）



写真 3-251 中通（榎尾道）を望む路地



写真 3-248 真田古墳と町並



写真 3-252 真田庵 北東



写真 3-249 真田古墳西側 町並



写真 3-253 真田庵 北東際



写真 3-250 真田紐工房と真田古墳



写真 3-254 幸村そば



写真 3-255 真田庵 北



写真 3-259 真田庵 北西



写真 3-256 真田庵 北方



写真 3-260 高野紙卸住宅 全景



写真 3-257 真田庵 本堂（県指定）



写真 3-261 高野紙卸主屋 高台部分は中通



写真 3-258 本堂 西側面



写真 3-262 高野紙卸 屋根の重なり（東方より）



写真 3-263 高野紙卸 北面



写真 3-267 永代橋 北方



写真 3-264 真田ミュージアム



写真 3-268 永代橋 北西方



写真 3-265 真田ミュージアム前



写真 3-269 東部の路地



写真 3-266 真田ミュージアム西方



写真 3-270 東部の路地 2

⑤『南通一西部』



写真 3-271 西部の東端



写真 3-275 連続する西方から 見返し



写真 3-272 東端の詳細



写真 3-276 北方の路地



写真 3-273 その主屋と土蔵 見返し

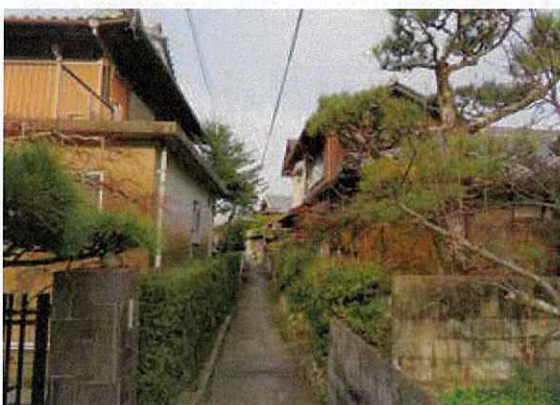


写真 3-277 北方への路地



写真 3-274 その土蔵から西方



写真 3-278 路地のテラカッタ装飾

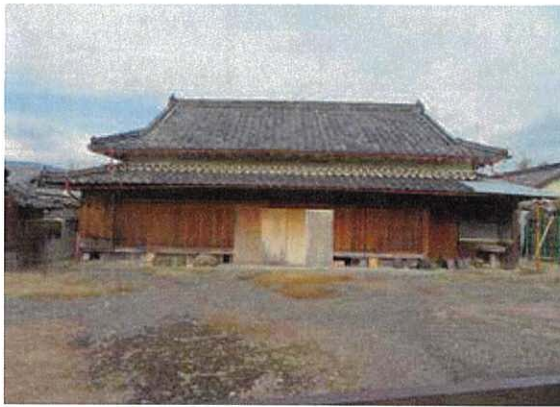


写真 3-279 西方の空家



写真 3-283 西方の東方から



写真 3-280 その背面



写真 3-284 西方の東方から 詳細



写真 3-281 南端部 本瓦葺の主屋



写真 3-285 見返し 西から



写真 3-282 西方の南方から



写真 3-286 北方の中通を望む



写真 3-287 西方 集合住宅



写真 3-291 西端の路地 2



写真 3-288 西部 西端（遠景は入郷地区）



写真 3-289 西方の土蔵・坂



写真 3-290 西端の路地

註 記

- 註 1 (p.1) 拙稿 紀伊半島南部における沿岸集落の分類について
和歌山地理第26号所収 和歌山地理学会 平成18年
- 註 2 (p.1) 拙稿 旧富田荘中村の集落景観の復原について
和歌山地方史研究第62号所収 和歌山地方史研究会 平成24年
- 註 3 (p.1) 拙稿 九度山町河根の集落とその景観
九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書(Ⅰ)所収
九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業実行委員会 平成29年
- 註 4 (p.1) 拙稿
・九度山舟戸の川湊の史料と現況について
九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書(Ⅱ)所収 九度山町文化遺産
を活かした地域活性化事業実行委員会 平成30年
・河根の建築景観と元中屋旅館について
九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書(Ⅱ)所収 九度山町文化遺産
を活かした地域活性化事業実行委員会 平成30年
・旧河根峠永楽屋の施設について
同活性化事業調査報告書(Ⅱ)所収
- 註 5 (p.1) 拙稿 色川の集落景観と荒木家住宅について
和歌山地方史研究第80号所収 和歌山地方史研究会 令和2年
- 註 6 (p.1) 拙稿 九度山町内における『紀の川の川湊』遺構について
河川No.903 2021.10所収 公益社団法人日本河川協会 2021
- 註 7 (p.2) 拙稿 前註6
- 註 8 (p.3)
・槇尾山由来記(槇尾山明神社蔵)
当所槇尾大和申は、高祖弘法大師御遺跡なり、元此の神代の昔より有為か峯として丹生・白髭の両大明神御鎮座
の所なりしか、弘法大師いまだ御童形の頃泉州槇尾山おわしまして、常に弁財天を御信仰なされ、日々御参詣遊ば
したるより、高野山御開闢の後も弥勒信仰厚く、毎月九度つつ槇尾山へ御参拝遊ばしたるに折りふし吉野川水高
く、いかかして渉るへしやと、立やすらひ給ひしに、弁財天女はるかに其厚信をしろしめして、此地へ影向し給日
御対面有しとなり、(後略)
・紀伊続風土記
村の産土神槇尾明神の祭礼年中に九度あり今祭礼廃すといえとも名義これより起きるといふに云う大師慈
尊院に住し槇尾明神に詣てし事九度にして明神に逢ふ村中に対面石あり因りて九度の名起きるといふ二説共に
信用しかたし
槇尾山明神社 境内周六町八間
本社 一間半 一間 高野明神 白髭明神 合祀
摂社 弁財天社 一間二尺 五尺
村の東三町許槇尾山にあり一村の氏神なり御手印縁起に北は槇尾山を限ると見えたるは即此森の山なり祭礼
六月十四日十一月十四日なり
- 註 9 (p.3)
・拙稿 古絵図からみた『高野山女人堂』について
日本遺産「女人高野」調査研究報告書 所収 女人高野日本遺産協議会 令和5年、
・拙稿 古絵図からみた『高野山女人堂』の建築的特徴について

注10 (p.7) 神奈川県葉山町郷土史研究会編集 『郷土誌葉山』第11号

「葉山町の歴史とくらし」拾遺 所収の吉田八千代・鈴木雅子の「江戸時代の旅 三留旅日記のルート」及び加畑千鶴子の「三留旅日記と古地図・古文書で辿る高野山」平成29年4月 によると八左衛門以下8名による旅を記した日記で、伊勢詣・熊野詣・西国巡礼・高野詣・長野善光寺詣・日光詣・江戸物見を経るという75日間に及ぶ旅日記である。

註11 (p.8) 和歌山大学システム工学部宮川研究室他 学生の卒業論文・大学院生の調査報告

- ・ 山口 桜 九度山町大字九度山における民家の特色に関する研究 平成24年
- ・ 藤本知可子 九度山町大字入郷・慈尊院地区における統的民家の特徴に関する研究 平成25年
- ・ 福永みづき 九度山町における織物工場の実測とその分析 平成25年
- ・ 西口恵美 九度山町大字九度山 商家の間取りと生活に関する研究 平成25年
- ・ 青山采柚里 九度山町大字九度山における地域資源に関する研究 平成25年
- ・ 山口 桜、宮川智子 九度山のまちなみについて
九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書(Ⅰ)所収 平成29年
- ・ 青山采柚里、西口恵美、福永みづき、藤本知可子、高砂正弘 九度山及び丹生郷・慈尊院における伝統的民家、地域資源、織物工場について 同活性化事業報告書(Ⅰ)所収 平成29年 美濃部正紘、高砂正弘
九度山町大字九度山における江戸時代の民家について 同活性化事業報告書(Ⅰ)所収

註12 (p.8) 宮川智子・高砂正弘・山本新平・他 共著 関連国際学会総会への事例発表

CHARACTERISTICS OF CULTURAL LANDSCAPE AS STREETSCAPE IN KUDOYAMA TOWN

omoko Miyagawa, Rena Ozaki, Kyota Matsuyama, Shinpei Yamamoto and Masahiro Takasago Nov.2020

註13 (p.10)『文化遺産を活かした豊かなまちづくりを目指した取り組み』の考え方

1. 指定された文化財のみが重要でなく、埋もれた文化遺産は無尽蔵に遺されており、これらを見出すべきである
2. このためには、見いだそうとする意識と見識眼が必要である
3. 各種分野の総合的な調査で“ほんまもん”を発掘する
4. 学術的な評価付けとそれを軸とした「物語を紡ぐ」必要がある
5. 重要な遺産であるということを認識するには、発想の転換が必要である
 - ・ 生まれたときから身近にあって、空気のようにあって当たり前存在と認識しがちである
 - ・ そのものが亡くなって初めて気づくことが多い
6. 文化遺産に対する“悪い3K”から“良い3K”への発想の転換が必要である
暗い・汚い・危険 → 継続性・経済的・賢明な施策となり得る
 - ・ これらの遺産は、幾世代にわたって営々と築き上げられてきたもの
 - ・ これらの遺産は、巨大な価値を内蔵している
 - ・ その内蔵する価値の数パーセントの“労力と経費”でその価値を蘇らせることができる
 - ・ これらの遺産はこの世に二つと同じものはなく、唯一無二のもの
 - ・ 新しく造ったものとは逆に、時を経るたびにその価値は増大してくる
7. 地域の活性化・再認識・まちづくりにつながる大きな資源となり得る
8. いずれにしても、地域住民と行政関係者の意識改革と“共働”が必要である
9. 行政の横断的なつながりの形成を図る必要がある

註14 (p.11) 妙音奉納巡礼札(慈尊院蔵)

妙音が慈尊院へ納めた全高460mm・桧製の尖塔型木札で、正面の上部に十一面観音立像等を描いた着色の豪華な札である。信州の妙音比丘尼が天文9年(1540)正月に西国巡礼を33回巡拝し「満願」を果たしたこと・同年9月に執り行われた「柱立儀式」に参列したことなどを記している。

天文九年 妙音比丘尼巡礼札の全文を次ぎに記す。

〔表面〕

(日輪) 信州住人妙音比丘尼
(サ)
(十一面観音立像) (キリーク) 西国三拾三度順礼結願
(サク)
(月輪) 天文九庚子年正月吉日

[裏面]

高野山金剛峯寺政所、慈尊院大師之御母子御堂 天文九年庚子
九月廿三日午ノ時御堂立 御本尊者奉一花 一刀三礼 御尊像御名ヲハ
京北衆生、為濟度弥勒菩薩号 後世ニハやらんとて、人人ハ南無弥勒大菩薩、
南無大師遍照金剛、御宝号一遍エコウアルヘソロ(ア・ビ・ラ・ウーン・ケン)ノ南無阿弥陀
文明十^己年十二月一日辰ノ時生出 ヨウヨウ年ツモリ生年六十二オト申時、
慈尊院弥勒堂造立、御供僧之内 阿闍梨秀尊法師 清算(花押)
ケンキョウ執行法印往生藤之坊 大工藤原助左衛門 同権大工兵衛助ノ南無弥勒大菩薩
尖塔型、全高460mm、肩斜長446mm、肩幅142mm、下幅142mm、厚さ6mm、
檜、桎目(一部板目)、槍鉋仕上、錐穴2箇所

註15 (p.12) 拙稿 重要文化財慈尊院弥勒堂の新知見について(上)・(下) 高野山新報3342号、3343号、平成27年

註16 (p.13) 和歌山県指定文化財慈尊院多宝塔保存修理工事報告書

日本伝統建築技術保存会設計事務所 平成24年7月

註17 (p.14) 弥勒堂の軒化粧裏板墨書 前出註15

①□南無弥勒如来応正等覺自他法界平等利益

生年□十二□

天文九年^庚子九月二三日御堂柱立□

阿闍梨□□

②(梵字) 南無弥勒如来南無大師遍照金剛

天文九年庚□

九月二三日午□

御堂柱立

註18 (p.15) 慈尊院遺跡の発掘調査 財団法人和歌山県文化財センター年報1999 2000

註19 (p.30) 紀の川一水の歴史街道― 紀の川水の歴史街道編集委員会編 p.169

『九度山は、江戸時代、高野山へ上納する物資の荷揚げ港として、それまでの慈尊院にかわる繁栄をみた。政所廃止を機に町石道が衰退し、不動坂口(学文路口)の高野参詣が中心となったが、物資流通に関しては高野寺領の九度山は紀州領の学文路や入郷よりは有利となった。「貴志米三千石の陸揚げ」の言葉に象徴される年貢米の陸揚げ川港として殷賑をきわめた。貴志米産地の那賀郡貴志・荒川・調月付近は秀吉が天正20年(1592)高野山に加増した所で、家康により九度山村と同じ高野山行人領となった関係で交流が深まった。また、九度山の船着き場は結晶片岩が紀の川に突き出し淵を形成し、着船に好都合な自然的条件も備えていたことが、寺領中第一の物資集散地として発展した要因であろう。

九度山の船着場となった浜は九度山台の北側傾斜地で、舟戸と呼ばれた。舟戸には年貢米のほか塩・干魚など山上寺院の消費物資や大名の建立する五輪塔などが荷揚げされ、返り荷に高野山から箸・樽材・杓子など林産物が積み出された。舟戸の浜で扱われる物資は荷受問屋が差配した。船着き場の岩盤上には、問文(といぶん)・問兵(とんひょ)・問嘉(といか)などの問屋と塩蔵・箸蔵・米蔵などの倉庫が立地した。しかし現在では問文(保田家屋敷)所蔵の箸蔵だけが残り、当時の面影をかるうじて止めているにすぎない。

九度山の舟数は、明治4年(1871)の「九度山村荷船営業願」(遍照寺文書)『九度山町史』[この稿における参考文献については(旧町史)に当たる]に、従来の荷船8艘・中荷船1艘の他に新造の中荷船1艘が記録される。江戸期に40艘前後所有した橋本には及ばないが、河内地方では学文路とともに代表的な港津の一つとして舟運の繁栄をみた。また、「営業願」には荷船扱いとして嘉兵衛(問嘉)・亦七(問文)らと並んで、水運にゆかりのある舟文の屋号をもつ(舟屋)文七の記名がある。』

註20 (p.30) 拙稿

- 1 善名稱院の建造物について 九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書 (I) 所収 平成29年
- 2 槇尾山明神社 社殿について 同報告書 (I) 所収 平成29年
- 3 九度山舟戸の川湊史料と現況について 同報告書 (II) 所収 平成30年
- 4 共著 四所荘官 岡家住宅について 九度山町文化遺産を活かした地域活性化事業調査報告書 (II) 所収 平成30年
- 5 槇尾山明神社と槇尾道について 和歌山県立博物館 特別展仏像と神像へのまなざし—守り伝える人々のいとなみ—図録所収 平成31年
- 6 九度山町内における『紀の川の川湊』遺構について 河川No.903所収 公益社団法人日本河川協会 2021
- 7 慈尊院弥勒堂の参籠墨書について 日本遺産『女人高野』調査研究報告書所収 女人高野日本遺産協議会 令和5年
- 8 古絵図からみた『高野山女人堂』について 日本遺産『女人高野』調査研究報告書所収 女人高野日本遺産協議会 令和5年
- 9 古絵図からみた『高野山女人堂』の建築的特徴について 和歌山地方史研究第85号所収 和歌山地方史研究会 2023年

註21 (p.30) 九度山の古老への聞き取り調査

- 1、話者 中西 規陽子 (みよこ) 氏 昭和5年 (1930) 生まれ 94歳
- 2、聞取日 令和7年2月4日、同6月1日
- 3、場所 九度山町九度山1336 中西氏の自宅

註22 (p.79) 高野山紀行—よみがえる八十年前の高野山—高野山真言宗参与会事務局 平成10年

(前略)

九度山と椎出

高野口駅で下車する人は非常に多かった。皆高野かと思えば左様でもなかった。高野口の名は実名を名倉とよぶ。高野山への近路に当たる所からして薦達の端緒が開かれたものらしい。それほど大きからぬ町だが、路の両側に宿屋、俵屋などの店が軒を並べて客を呼ぶので大分雑踏していた。殊に俵屋は椎出まで乗せるので、私も「どうです。兄さん、山の下まで如何です」などと言って何度呼ばれたことか分からぬ。その人たちが路を塞いで多勢集まるので高野詣りの約半数の者は皆乗ってう。私はその包围を切り抜け、切り抜けしていく中にも後方から威勢良く客の乗った俵が幾台となく走って行った。

蓑・御座・金剛杖を持ち、中には数珠繰りながら行く老人もあった。駅では私の前に頭の光る僧侶が一人降りていった。町では背に幾つとなく御印の付いた巡礼姿の群れが練って行った。それらの人に交じって私も次第に町をはなれていった。町を出ても立派な二間幅の路が田畑の中を通っていた。(中略)凡そ十町程も行ったと思う頃、道は次第に左に曲がって何時か堤防の上となっていた。(中略)

道が又右に曲がると紀の川の浅い流れであった。流れとて殆どないこの川は見渡したところ一面に磊々たる砂州で、その上を多くの人の自然に踏みかためたあとが小石原の中にかすかに道を示していた。物の十間もゆくと初めて俄作りの木橋となって本流を渡るのであったが、橋は多数の人や車の往来につれてかなり上下に揺れた。橋上より下流を望めば、川は右より大きく曲がって河原の間を流れ、その流れは涼々の音を立てている。その上に雨引山は聳えていた。

追憶の涙

対岸は直に九度山町である。岸に高く石垣を築き、その上に高く人家が建ち、橋を渡り河原に又下りると直ぐにその崖を仮設の足場で上がらねばならなかった。私が未だ橋の半にも到らぬのに大勢の人の続々とその足場を上り、人家の蔭にかくれてゆくのを見ては只なんとなく息がせいて仕方がなかった。その道を一町も行くと道は左に折れ全く九度山の町に入る。

約三町も辿った頃、はからずも路傍の石に真田昌幸公遺跡と刻し、傍らに土地の青年会の手による道標もあるを見、急ぎその示す通り右の細い道に入り、路地の横を半丁程もゆくと人家に囲まれて一宇の瓦葺きの古からぬ

寺院に入った。狭い寺庭の一隅、柳桜が参差として枝を支えた中に一基の墓石がある。こけを払って碑面を見れば、之ぞ真田昌幸の墓であった。

月日を溯れば恰も慶長の昔、時の驍将真田昌幸は関ヶ原の一戦に惜しくも味方の敗亡に帰せる後、一子幸村を伴い、この九度山村に一時隠棲の庵を結び、露おく朝、月の夕只管に一子幸村に文武を鍛えしめるのを老後唯一の慰安となした。その中心いかなるものであったろう。豊臣家恩顧に未だ報いぬうちに、主家は日の西山に没するように唯々没落の悲運に向かって行くのであった。

而も我身武運終に拙く、草深き此の僻村に入るのをやむなきに至り、時には敵の間諜が柴垣越しに探りを入れて行ったこともあった。時には彼の一身、既に空しからんとすることもあった。併し、一子幸村の日に月に力量技術の進むを見ては、老いの涙そも如何なものであったろう。片割月に暫し非憤の涙を絞りしを知るや如何に。彼は終に死んだ。併し幸村は大阪城櫓の火と共に桜花の如き美しき最期を遂げた。彼や以って冥すべきである。彼も亦一ヶの豪傑であった。されど烏兎は匆匆として去り、今や墓辺の寂涼に追憶の涙、禁ぜしめざる一旅人を止まらしむるのみである。時しも鶯が鳴いた。また冥福浄土への祈りであろうか。

墓辺に佇立数分、決然として善名称院(寺)を去った。本道に出て行くこと一町。道は右に折れ緩やかな坂道となる。前面には築山の様な巒翠幾重となく重畳して我を圧している。梨の木峠への道と分るれば道の右に騒声と共に突如溪流が現れた。即ち高野山上に発して幾多の細溪を会わせ流下する丹生川であって、山の間を激しい勢いで下ってきたものが、ここで急角度に曲がって九度山町の裏を通り、紀の川にと急ぐ(注ぐ)のであった。(中略)

溪流は道路より低きこと数丈にあり、左岸の山は直ちに水流に臨み、相激する所には巉岩露出し、驚くべき浸食作用のため岩面或いは洞穴を作り、水、之に入って大渦を画き、或いは中断して、水、其間を淹下する。時には倭生の樹叢岩面に糊着して急湍の上に掛かり、時には水近く、枝、垂下して矢の如き水を落るものもある。道転ずれば景更に転じ、登るに従いて更に、景、奇絶を加え、且つ、水の藍と白とは岩のし赭色と相味して壮美極りない。殊に岩は和歌の浦所在のとはほとんど同質で、青色の多い、成層の著しい岩石であった。

道は緩い登り道に過ぎず、砂利敷きの二間幅で、このため山も登りよくなったというもの、後ろより、前より高野山上り下りの腕車が次々と行く。その度、路をさけて歩きにくい砂利上を行かねばならぬ、繁に堪えぬ。

(中略)

九度山より二十町、丹生川の鉄橋を渡り、細流に沿うこと尚三町にして椎出の郷に到る。山上までの里程は高野口より一町毎に置かれた石標によって分る。石の両側に、片側には「距女人堂何里何町」、他面には「距高野口駅何里何町」と記してある。最初のを見たら、女人堂まで三里二十七町としてあった。(中略)

この里の宿は皆、俵と駕籠の客待ち所である。高野口より来た俵はこの先は急峻で通ぜぬので、俵で来たものは此処で駕籠に乗り換えて女人堂まで行くのである。家の中には人力車や駕籠が無数に並べてあり、俵夫、駕籠かきは群がって麓の方を見ている。そして山の下から俵上がってくるのを見ると「今度は俺だ」等と駕籠かきは手につばつけて客を己こそ手に入れ様として互いに争う。俵夫は駕籠に客を受け渡してから、下山の客を待って又山を下っていくのである。

高 野 上 り

椎出から神谷まで一里の間は長坂と言って可成の難所である。何時の間にか路は二つの分れて私は左の道に入居た。だんだん細くなる路なので怪んで傍らの人家で聞くと矢張り是れだとの事で安心して上った。道は終に一間幅となり草山は我を圧するように行く手に立ちただかつて、人は山と山の狭をからくも綴る峻坂を辿るのであった。

(後略)

あとがき

この報告書は「九度山の町並」に関する歴史的なことと外観調査に関わるものについての成果をとりまとめたもので一定の問題を提起できたと考えているが、個別の詳細調査・史料調査・そのまわりの景観に関する調査・聞取調査・生活等に関わる事項の調査については実施できておらず、この町並の正確な歴史とその内容について十分に把握できていない可能性もあり得るが、大きな齟齬はないものと考えている。

この報告書の本題を『九度山の町並とその文化的景観の調査報告書』としたが、まだまだ完成したものではなく上記のような状況にあることから今後もこれらの事項について調査を継続すべきと考えており、一区切りとしてあえて『(その1)』を附したものでありこれらの事項について早期に進捗するとともに、町並の適正な保全と活用が図られることを念じている次第である。

九度山の町並とその文化的景観の調査報告書
(その 1)

平成 7 年 11 月 発行

発 行 九度山町教育委員会

執筆・編集 山 本 新 平